



ひとつ2200円(税別)という値段の中に、カイザーサウンドの考え方が凝縮されているインシュレーターだ。15年以上続くロングセラーになっている。もともとは真鍮製として登場した製品のマークII的なモデルで、素材がシリコンを含有する真鍮であるエコプラスになり、形状も上側がおだやかな曲面を持つものへと進化している。そのため、全高が0・08mm増加しているという。設計も製造も厳密である。真鍮製のものとは区別するために、その方向性を示すマークは通常は「A」だが「E」の刻印になっている。ちなみに、「A」とか「E」といった刻印は、エネルギーの入る側。その18

■ローゼンクランツの代表的インシュレーター

**Rosenkranz
PB-BIG3**

¥33,000(オスメス1組・税別)※写真右手前
●サイズ:高さ33.8mm×直径50.7mm

PB-Brother

¥5,000(1個・税別)※写真中央
●サイズ:高さ22.05mm×直径34.9mm

PB-BABY(ECO)II

¥2,200(1個・税別)※写真左
●サイズ:高さ6.76mm×直径23mm(中心に2.5mmの穴開き)

0度反対側がエネルギーの抜けていく方向、出ていく方向、である。設置の仕方としては「印が機器の背面になるように」。さらに「上下の向きは文字が正しく読めるように」というのが基本だ。本誌試聴室でその音をテスト。リファレンスのCDプレーヤーの下で確認している。その音は背景が静かになり、全体にすつきりと、音の透明感が増すものだ。それぞれの音像の定位は明確だが、やや手前に展開する音場に大きめに見えてくる。音色感としては音の濁りが消えて、たとえばエコー成分の消え際のきれいさとか、楽器本来の音色が純度高く聴こえてくる。小型ながら音の変化率は大きい。

●オートローゼンの端緒
「PB-BROTHER」

歯と歯茎を単二で実現する
炸裂するような表現力が魅力

PB-BABY「E」IIと比較すると、サイズも重さもだいぶ大きくなっているのがPB-BROTHER。エコプラスという単一素材でありながらも、「歯と歯茎の構造」を持ったインシュレーターの音に近づけているという。興味深いのは、ウェブサイトの説明で「ラテン車の走りを設計に活かした」と記

●インシュレーターの王様
「PB-BIG3」

美しさとリアルさが同居
圧倒的な臨場感を引き出す



写真左がカイザーサウンドの貝崎静雄氏で、写真右が筆者の鈴木 裕氏。貝崎氏が手にするのは同社の最高峰インシュレーター「PB-BIG3」、鈴木氏が手にするのは、オートローゼンで培った技術を投入した注目の新製品「PB-599」

注目連載

オーディオアスリート

クルマとオーディオによるカイザー・チューニングの世界⑤

「ローゼンクランツ」と「オートローゼン」 2つの世界を具現化するインシュレーター

20世紀の2大工業製品といえるのがクルマとオーディオ。本誌はオーディオ誌であるが、クルマにも関心のある読者も多いはず。そこで本企画は、カイザーサウンドが手掛けるサウンドクリニックについて、同社が「オートローゼン」というブランド名で実践するクルマのチューニングに例えながら解説していくというもの。レポートを担当するのはオーディオ評論家の鈴木 裕氏。オーディオはもちろん音楽とクルマをまさに自らの体で体験してきた人物である。そこで本企画のタイトルは「オーディオアスリート」に決まった。命名者はカイザーサウンドの主宰者である貝崎静雄氏。鈴木 裕氏との強力タッグで読者の方々に、クルマを通してオーディオチューニングの重要性を通してお伝えしている。第5回目はクルマとオーディオのファインチューニングの世界を具現化する存在として、ローゼンクランツのインシュレーターをクローズアップ。オートローゼンの最新技術を投入し、フェラーリ599のチューニングから生まれたインシュレーター「PB-599」も登場。その音質的效果もお届けすることにしよう。

●レポート
鈴木 裕
Yutaka Suzuki

■写真真:
小林幹彦(影虹舎)

■今回のテーマについて

カイザーの思想と技術を投入した
ワッシャーとインシュレーター

貝崎静雄氏のカイザーサウンド。そのホームオーディオ部門でのブランド名がローゼンクランツ。クルマ部門がオートローゼン。今回はその両者に共通して使える製品を紹介してみよう。ホームオーディオにとってはインシュレーターであり、クルマとしてはホイールとハブの間に装着するワッシャー(ホイール・インシュレーター)という存在である。その成り立ちを考えるとカイザーサウンドのものの考え方や技術力が見えてくる。その前にまず、ローゼンクランツの代表的なインシュレーター1、3種をあらためて見直してみよう。そもそもローゼンクランツとして頭角を表したのはインシュレーターというジャンルであり、ロングセラーとして現在でもラインアップされているものだ。それらは今回の試聴でも実に魅力的だった。

■代表的インシュレーターを紹介
●小さな巨人
「PB-BABY(E)II」

小型ながら同社思想を凝縮
楽器本来の音色を再現する

その音はふたつの側面を持っている。音自体はしっかりとっていて、全体的に大人っぽい音楽の聴かせ方をしてくれる。一方、音量感は高くなり、音が前に出てくるオーディオ的な音でもある。ドラムのキックの低音の馬力やその瞬発力。オーケストラでも各パートが独立して見えてくる感じなど、音が逃げないで、分解能が高く、きちんと前に出てくるのだ。また、シンバルの分厚く炸裂するような表現も楽しかった。総じて音楽が良く聴こえてくるインシュレーターである。



■F599のチューニングから生まれたホームオーディオ用のインシュレーター
Rosenkranz PB-599 ●サイズ：高さ12.25mm×直径38.5mm●質量：92g
 ●構造：上面に10本のスリット、下面に上面とは逆の対角線上に6本のスリット
 ¥15,000(1個・税別)
 ※発売記念価格¥12,000(1個・税別・200個まで、または、'17.1月末まで)



ホームオーディオ用のインシュレーターは弊誌試聴室でも試聴。特に「PB-BIG3」と「PB-599」は、TAD「TAD-E1」の脚部に3点支持で設置してテストした

れた。オートローゼンの2種類のカラーはいずれもF599とドライバーの距離感を縮めてくれるもので、フェラーリが想定しているよりも低い速度域でのドライバーピリティを向上。楽

しく乗れるチューニングだった。ホームオーディオ専用モデルを試す**全体のエネルギーが高まり流麗な、美しい世界が出現**

PB-599のテストは、この記事の前半、3種類のインシュレーターといっしょに行った。まずリファレンスのCDプレーヤーに使い、そしてTADのE1というやや大型なフロアスタンディングのスピーカーの下でも試聴した。

12気筒エンジンが咆哮した時のサウンドは骨や脳髄まで浸透してくるほど官能的なもの

だった。聴き出すと、音にはコクや深みがあり、音の色彩感としてはシックな感覚。ピタミンカラーのような発色の良さではなく、より成熟した、大人っぽいニュアンスの色彩感だ。細部の描写は細やかで、精緻と言ふよりも丁寧な描き方をしてくる。ただし、メロウになりすぎず、ベースやドラムのキックといった低音の生き生きとして鳴る様子も実に印象的。また、音場感

が、値段通りのクオリティの序列があり、それぞれに満足度の高いものだった。たしかに素材も吟味されているが、その形状や構造などで、総合的に音の性能や音楽表現を持たせている。よく考え、たくさん試作し、というきちんとした開発をしているのが窺われる製品に感じられる。

■最新モデルを紹介 フェラーリF599の走りに対応するインシュレーター

前回このページにも登場していた益野英昭さん。仙台・石巻で七店舗を展開するケイキ屋さん「アルパジヨン」のオーナー・シエフだ。その益野さんのオーダーに応じて開発されたのがフェラーリF599の、ハブとホイールの間に装着するワッシャー(ホイール・インシュレーター)であり、そしてホームオーディオ用のインシュレーターでもあるPB-599だ。

以上、ローゼンクランツの代表的なインシュレーターを、条件を整えて順番に聴いていった

●クルマ専用モデルを試す
 微塵な不安もない獐猛な加速
 ドライバーとの距離が縮まる

まずF599について書いておきたい。今回、F599のためにオートローゼンでは2種類のカラーを開発。実際に装着してテストした。そのインプレを取るための運転を筆者(鈴木裕)は担当させてもらったが、きわめて印象的なクルマだ。フロントボンネットの下にV型12気筒、6リッターのエンジンを収納。益野さんのF599は680馬力の仕様ということだが、それを後輪に伝えて走る2008年に登場したスポーツカーだ。全長は4.7mを切るが、全幅は2m近く、車重も1750kgというやや大柄な車格だが、実際に乗るともっと小さくて軽いものを走らせている感覚が今でも信じられない。アクセルを深く踏み込むと獐猛とも言えるような加速をするが、シャーシの性能が高く微塵の不安もない。12気筒エンジンが咆哮した時のサウンドは骨や脳髄まで浸透してくるような官能的なもの。一方、そのエクステリアのデザインや内装は優美で、フェラーリという唯一無二のブランドを体現しているような存在に感じら

益野英昭さんのオーダーに応じて開発されたフェラーリF599専用、ハブとホイールの間に装着するワッシャー(ホイール・インシュレーター)の取り付けの様子



F599のフロントボンネットの下にはV型12気筒、6リッターのエンジンを収納



今にもスタートダッシュしそうな脚からお尻にかけてのシルエットが美しい



BREMBOの精緻なブレーキ機構には全て製造管理番号とデータが打ち込まれている。



まずはホイールを取り外す



この日のために用意されたF599専用のワッシャー(ホイール・インシュレーター)「PB-599」



ハブとホイールの間に「PB-599」を取り付け

E1の底には3点のアルミ製の薄い脚があり、その下に敷いたのだが、アルミとエコプラスという金属どうしが当たる要素は一切なかった。まず感じるのは、音の透明感上がり、しなやかで流麗な、美しい世界が出現するということ。音場空間は広く、ノイズフロアが下がるのか、エコー成分が多くなり、その空間を満たしている。左右だけでなく前後の定位の描き分けがしっかりしており、しかもサウンドステージがやや手前に大きく展開。ただし、情報追求型というよりもストリングスのきれいでよく鳴りあっている感じとか、それぞれのメンバーのプレイが聴こえてくる感じなど、音楽が良く鳴るインシュレーターだ。PB-ROTHERRの音の方向性にも近いが、もっと全体のエネルギーが高く、もっと美しい。

にした時の表現だ。車体側とホイールの関係にしても、スピーカーと床の関係にしても、実際には一方的なものではない。床からの振動もあるし、スピーカー側からの振動もある。それをコントロールしている存在で、方向を変えるとどうなるかと思っただけだ。

カイザーサウンドが推奨する基本的な置き方では美しい方向が支配的であったのに対して、裏の設置ではミュージシャン一人一人のプレイがよりリアルに、より高い訴求力で聴こえてくる。これは明確な違いで、聴き手の好みで使い分けられるべき種類のものだ。同時に思いだしたのは、PB-BIG3。PB-599のふたつの音の側面を統合したような音なのだ。形、大きさ、素材は違うが求めている方向がさすがにブレしていない。

回転運動とGの力を応用したハイスピード&ハイパワー設計

それにしてもよくよく見るとPB-599の造りはおもしろい。貝崎静雄氏はこう言っている。「ハイスピード・ハイパワー

裏にして設置することで訴求力の高い音質を実現

興味深いのは、PB-599を本来とは逆、対角線上に6本のスリットが入っている方を上

「エコプラスを使っていますけど、素材の音はしません。全部の形に意味があります」ということが実際に聴くと実に良くわかる。

音楽にはグルーヴや推進力があり、強烈なアタックから微細なデュナーミクがある。それらを見事に描いてくるローゼンクランツ。それがクルマのチューニングに生かされ、シャーシとのタイミングが合ってくるオートローゼン。お互いの分野で進化しつつ、お互いが刺激を受け合って相乗効果を生み出しているのを感じた。

ローゼンクランツの音楽的な推進力とオートローゼン・チューニングがここに結実